

《書評》

増井典夫著 『近世後期語・明治時代語論考』

矢 島 正 浩

本書は、これまで著者が一九八七〜二〇一〇年に発表してきた論文を取りまとめたものである。それらが、以下の四部構成において、配置されている。

第一部 近代語における形容詞の研究―意味・用法を中心に―

第二部 近世後期語研究―資料性の問題を中心に―

第三部 明治時代語研究―資料性の問題を中心に―

第四部 近世後期上方語から近代関西方言へ

この構成の下で、著者がこれまで世に問うてきた論文が、ほぼ刊行順で、下位の各章に配列されており、問題意識ならびに研究履歴の変遷をたどれる構成にもなっている。

この構成から、本書が取り扱う時代・言語地域、さらには着目する事項において、きわめて広い射程を持った研究であることが想像される。ただし、以下に指摘する、本書の特徴とも密接に関わることによつて、本書が真にねらいとする問題や対象、さらにはそれに対応して得られた見解を正確に捉えるのは、実はたやすいことではない。以下、本書について一読者として感じたことを、あえて忌憚なく記すことによつて、労作を評し、紹介する試みに代えたいと考える。

まず、本書が最も評価されるべき点は、文献を言語資料として用いる際の手続きを自覚的に踏まえ、言語的事実を誠実に観察し、記述しようとするその姿勢にある。丹念に調べ上げた情報の積み重ねは、時間を超えてその価値を保ち続ける。まずここで、その成果の一端を、第一部から紹介する。

そこでは「ゑらい」「おそろしい」「いかい」などを取り上げ、主に副詞的用法の派生、盛衰のさまを明らかにしている。近世後期上方板・江戸板の洒落本をはじめ、近代に至るまでの口語資料を広く用いて、実際の使用例を博搜する方法である。「ゑらい」については、東国語→上方語→江戸語の順で使用が確認されるという特異な歴史があること、幕末に至るまで「程度がはなはだしい」意の用法のみであり、幕末以降、「立派だ、秀れている」意を生じること（すなわち、程度副詞的用法から評価的用法を派生するという、「抽象→具体」の、一般とは逆の語義変化をたどること）などが明らかとなった。また、「ゑらい」「おそろしい」について、連体形を副詞的に用いる用法が近世期からあることに着目し、それらの多くが一語の形容詞類を修飾する形である（例、「ゑらい迷惑だ」ことなどを観察する。「いかい」については、古代では「荒々しい」などの意で用いられており、室町後半からは「程度がはなはだしい」意の修飾用法のみとなること、その段階で連用形イカウと連体形イカイに限定され、江戸語では「いかい」が形容詞連用形ク語尾の使用を失ったために、形容詞としての母体を失って衰退したことなどを論じる（細かいことだが、本書は「ク語尾を持たない」ことを「いかい」衰退の「一要因」とするが、衰退の現れ（「結果」）と見るべきか）。

この調査範囲における言語的事実の整理が誠実に行われており、語史研究に大きな役割を果たすものと言える。これらに代表されるような、地道な調査に基づく語史記述が本書の特長であることを、まずもって明記しておきたい。

また、本書の中で評者が最も興味深く読んだのは、第四部の第一・二章であった。そこでは、辻加代子（二〇〇七）「近世京都語資料に現れた待遇表現形式チャッタに関する覚書」『日本語の研究』三・一の主張の検証を軸に、「興斗月」とい

う作者不明の京都板洒落本の資料性について論じている。辻は、同洒落本に用いられる「チャツタ」を、同時期の京都語として取り扱う。しかし、著者は、この語形が「興斗月」にしか現れないことを調査から明らかにし、矢野準（一九七六）「近世後期京坂語に関する一考察―洒落本用語の写実性―」（『国語学』一〇七）の「多数決の原理」を援用し、京都語と捉える辻説を退ける。さらに方言書の記述類も参照しながら、「興斗月」の「チャツタ」については、作者が京都市外の人物であり、結果として登場人物も京都市外の方言を使うことになった、と考えるしかない」（二八四頁）とする。洒落本研究に通じた筆者ならではの見解であり、資料研究に対しても重みのある提言となっているのである。

このように、本書は、言語研究に用いる文献の「資料性」を問うことに力を注ぐ。第二部では洒落本の言語資料としての特質に迫り、第三部では、近代語研究を行う際に、初版本を用いることの重要性などを中心に論じる。いずれも言語研究の基盤部分に対する貢献を含み、初学者に教えるところも多い。

なお第二部、第三部には、方法論上、以下の点などにおいて、やや気になるところがあった。

第二部第二章「江戸語資料としての十九世紀洒落本について」は、享和以降の江戸洒落本の国語資料としての価値を、再提案したいという目標を掲げる。一般的には、まず指標たり得る文法事項や語彙を選定し、それらを用いて同時期成立の滑稽本類の使用状況と比較する方法などを思い浮かべるところである。しかし、本書は「きつい」「ゑらい」「いかい」の使用数・用法から検討する方法を採る。これらの語は、著者自らが検討途上にあるものであり、十分にその用法が明らかにされた段階にあるとは言い難い。そのため、滑稽本などの状況とあわせつつ、「ゑらい」類の江戸語における語史研究も並行して行うスタンスを取らざるを得ない（第二節、第三節など）。資料性検証の根拠として検討中の語史情報を用いる結果、根拠と結論に循環が起こり、読み手としては、本書の主張に導かれにくい状況が生まれている。

第三部は、近代語資料の扱い方に関わる問題を取り上げ、言語資料として文献を用いる以上、原文を重視すべきであることを論じる。ここでは、いわゆる「初版本」を基準とする立場から一貫して検証を行っている。つまり、「初版本の前に

雑誌等に掲載された初出の形のもの」や「草稿本」には、拘るものではない。むしろ「資料の均質性」という観点からは初版本にそろえることがベスト」とする考え方である(二〇〇頁)。近代語資料を取り扱う際の指針たり得る主張として理解するためには、そう考えていい論拠をもう少し詳しく知りたいところである。

そして、第一章では、同じ「当世書生氣質」を、2節では昭和女子大学所蔵本、4節では日本近代文学館所蔵本をそれぞれ「初版本」として用いて、周到である。ただ、その方法を採用意図も、それにより判明したことについても言及がなく、読み手には少々負担を強いることとなっている。このあたりについては説明がほしかったように思う。

なお、この一連の検討において、本書は『日本国語大辞典』(初版。一九七二～一九七六年刊)をしばしば用いている。そもそも辞典というものは、不十分な点を含み、研究の際の目安を得るための補助的なツールに過ぎない。その意味で、校訂された本文の遺漏を検討するに際し、同辞典の記載を基準・根拠とする方法は、やや物足りなさを感じる。実際、本書では、同辞典が、近代語資料としては問題のある『明治文学全集』の記述を引いていることによって、不適切な記述を含むことを指摘する(ただし、同辞典の第二版(二〇〇〇～二〇〇二年刊)では改められた箇所も少なく(例、「馬耳東風」の近世期における読みに関わる部分など)、現行の問題としては、再整理の必要を生じている)。このこと自体が、原文によらず二次資料を用いる言語研究の危うさを、まさに身をもって示すことになっていると思われる。

二次資料の危うさに気づかされた読み手は、例えば、第一部第一章4節「明治以降の「えらい」の漢字表記」で、『現代文学大系』(筑摩書房)や『漱石全集』(岩波書店)類を用いて表記を検討する方法などにも不安を覚えよう。資料性の問題を大切に扱う本書であるがゆえに、読み手の期待する水準も押し上げられるのかもしれない。

ところで、本書は、「はじめに」の第四部について触れるところで、「ここで取り上げた事項を含め、研究はまだまだ道半ばであるが、このあたりで区切りとしてここに示すこととした」とある。つまり、筆者自身、何らかの改善すべき点を

認識しつつも、まずは、各論文の執筆時点における問題意識を整理することを重視し、必ずしも研究としての完結体の提示に拘っていない方針にあるということである。

この方針で本書を編む部分があることについては、読み手も、ある程度、心得ておく必要があるかもしれない。いわば、研究途上にある状況を公けにすることで、それぞれの読み手の問題意識を刺激し、今後の研究の展開に供していく姿勢を表明しているとも受け止めることができるからである。実際に、著者は、研究の中途にあることを自らのことばで示しながら、論を展開する箇所がある（例えば、右に引いた「はじめに」に対応する第四部第三章以下。他にも、第一部第五章、第二部第三・四章、第三部第五・六章などでも、そう著者が認識していると思しき記述が散見される）。一般的な研究のあり方からすると、そのような舞台裏を示すのは異例とも言える。ただし、これが本書の意図的な方針であったと理解すれば、あとは読み手が、それぞれの立場から課題を整理すればいいということでもある。

その立場からは、いくつもの魅力的な課題が浮かび上がるのであるが、紙幅の関係で、著者自身が掲げる課題以外で、評者が興味を持ったことから一点だけあげることとする。

本書の第一部「形容詞の研究」は、形容詞の中でも一貫して、程度副詞用法の解明に問題意識が向かっている。その検討の中で、程度副詞語彙史としての興味深い研究への連なりが示唆されている。

例えば、江戸語における「いかい」「きつい」が、特に近代以降は衰退する事情について、「実に」「たいそう」「まことに」が程度副詞として大きな勢力を持つことが関わっていること、さらに「きつい」の衰退を考察する部分では、それらの新興の程度副詞が規範的な語とされたのに対して、「きつい」が「標準語にふさわしい品格を持たない語と規定された」ことなどが関わっている可能性があることを論じる。

こういった示唆に対しては、広範にわたって研究の展開が可能である。「きつい」類が、規範的書きことば的要素を持つ標準語には継承されないのならば、話しことば（俗語・東京語）としては残ったのか。東京語の成立史、あるいは標準語

の形成論などへと連なる、きわめて興味深い課題である。あるいは、ここで、「実に」「たいそう」「まことに」が「いかい」「きつい」を退ける要因になるとする主張に説得力を持たせるためには、これらの副詞類が、いつの時代から、どういった位相を出発点として、どう勢力を伸ばすのかという問いに答え得る調査が必須である。そもそも、「ゑらい」「きつい」「いかい」類が、なぜ、近世期に、程度副詞的用法を生じたのか、相互の用法上の住み分け（同時期の併用を可能にした原理）はどうなっていたのか。それらは、上方語とはどのように異なり、そしてそれはまたなぜそうであるのか。広く、程度副詞相当表現の歴史として、継続的な研究が俟たれるところである。

本書は、特段に序章や終章を設けず、索引を付さない。つまり、各論の響き合いから、どういう組織を持った論なのかを示すことや、本研究全体としての「問い」、それに対する「結論」という呼応関係を示すことに、著者は禁欲的である。それは、そのことを現段階で急がないという、本書の研究に対する著者の認識の表明として読むべきなのであろう。そして著者は、おそらく、先に引いた「はじめに」の方針と表裏の、必然的なありようとして説明することであろう。

この問題は、本書の構成全体とも連動している（あるいは各章の各論においてもその傾向は顕著である）。冒頭に引いた四部の構成は、どのような研究体系を目指すものなのか、雄弁ではない。本書のタイトル「近世後期語・明治時代語論考」も、特定の問題意識を主張するものではない。読み取りは広く、読み手の側にゆだねられている。その意味で、本書は、読み手の力量の中に、それぞれ固有に存在する一書なのであることを思う。

記述的・帰納的方法を守り、事実に基づくと語らせる方法、またそれによって言える範囲を大切に著者の研究姿勢と、相反するであろう見地からの妄言を連ねた。海容を請いつつ、筆を擱きたい。

〔二〇一二年一〇月五日発行 和泉書院刊 A5判 三四〇頁 一〇〇〇〇円＋税〕

（愛知教育大学教授）